

## 学位請求論文審査報告要旨

2013年5月15日

申請者 アレクサンドラ・ホロボロドゥコ  
論文題目 The Problem of Translating Emotion Words from Russian into Japanese in F. Dostoevsky's Novel "White Nights": Contrastive Analysis of Three Japanese Translations with the Original Russian Text Concerning Emotional Discourse

論文審査委員 糟谷 啓介  
イ ヨンスク  
坂内 徳明

### 1. 本論文の内容と構成

本論文のテーマは、ドストエフスキーの小説『白夜』の原作と翻訳を対照させて分析することによって、ロシア語と日本語のあいだでの感情表現の翻訳にかかわる問題点を明らかにすることにある。翻訳理論において常に問題となるのが「等価性 (equivalence)」の概念である。翻訳とは、ある言語で書かれた作品を別の言語に移すことだとすると、そこにいかなる「等価性」がありうるかが問題となる。一方、言語表現のなかで感情言語の占める独特な位置は、認知意味論の研究のなかで研究されてきた。なによりも、感情言語の意味作用が文化特定の (culture-specific) な側面をもつ、つまり普遍的ではなく特定の「文化」に属することが注目され、その観点からの意味構造の分析が行われてきた。それでは、感情言語を翻訳するとは、どのような行為なのであろうか。翻訳者は「文化特定の」な感情表現を別の言語に移し替えるときに、どのような翻訳ストラテジーを使っているのだろうか。これが本論文を貫く大きなテーマである。

論文構成は以下のとおりである。

#### Introduction

Overview

Aims of the Research

Object and Subject of the Research

Value of the Research

#### I. Previous Research

A. Universality and Cultural Specificity of Emotions

B. Universality of the Term "Emotion"

C. Emotions, Emotion Categories and Concepts, Emotion Words

D. Translation of Emotion Words

E. Discourse Analysis

## II. Research Method

- A. “White Nights” by F. Dostoevsky
- B. Taxonomy of Emotion Words
- C. Method of Translation Analysis
- D. Emotional Discourse Analysis

## III. Case Study: Contrastive Analysis of Translations

- A. Expressive Emotion Words
- B. Descriptive Emotion Words
- C. Emotion Metaphors and Metonymy
- D. Emotional Discourse Analysis

## Conclusion

## Bibliography

### 2. 本論文の概要

序章では、本論文の目的、主題、題材、オリジナリティが提示される。本論文では、ドストエフスキーの小説『白夜』の翻訳の検討を通じて、特定の文化の特徴である感情言語を翻訳することに含まれる問題を分析することを目的にすることが述べられる。また、先行研究に基づいて、感情言語を「感情を記述する言語」「感情を表出する言語」「比喻（メタファーとメトニミー）」に分類することができるとされ、本論文の視点として採用することが述べられる。

第一章では先行研究がとりあげられる。まず「感情」の普遍性と文化特定性についての研究が参照される。一方では、感情そのものの普遍性を主張し、文化的相違はコンテキストに由来するものにすぎないとする見方があり、他方では、感情の形成において特定文化の果たす役割を強調する見方がある。しかし、本論文では、感情そのものの問題を論じるのではなく、個別の言語と文化が感情をどのように分類し、それをどのように語彙化しているかを扱うとされる。日本語における感情表現の特殊性はこれまでもしばしば論じられてきたが、翻訳という側面からの検討が不足していた。また、本論文の目的は、翻訳の善し悪しを定めたり、取るべき翻訳手順を提案することにはなく、既存の翻訳作品の記述的な分析にあることが示される。

第二章では、本論文で用いられる題材と方法論が論じられる。まず、ドストエフスキーの『白夜』は「感傷的ロマン—ある夢想家の思い出」という副題があることから明らかなように、多くの感情表現が含まれているので、本論文の分析材料とするのに適切であること、そして、小沼文彦訳（1958）、北垣信行訳（1974）、井桁貞義訳（2010）の三種類の翻訳を比較検討することが示される。感情言語については、Zoltán Kövecses による言語学的分類、Johnson-Laird & Oatley による心理学的分類をとりあげ、本論文での枠組みを整理している。翻訳理論については、「形式的等価性／動的等価性」の二分法を提唱した E. Nida、翻訳ストラテジーの観点から新たな分類を提唱した P. Newmark、翻訳者の実践に近い観点から分類をおこなった M. Baker をとりあげて議論を進めている。たとえば、Newmark の分類によれば、原典テキスト (ST: Source Text) と目標テキスト (TT: Target Text) の間には、一方の極に「逐語訳」、他方の極に「脚色」がある八段階のスペクトルが

あるものとされ、それぞれの場合に取るべきストラテジーが提示される。本論文では、基本的には Newmark の枠組みに基づきながら、より記述的な観点にたつ Baker の分類によってそれを補完することが確認される。

第三章では、本論文の主題である『白夜』の原文と三種類の翻訳との対照分析が行われる。分析においては、左側に原文を配置し、その右に当該個所の井桁訳、小沼訳、北垣訳を配置する表が提示され、原文と翻訳文の対照が容易に行えるような工夫がこらされている。章全体は上記の分類にしたがい、「感情を表出する語彙 (Expressive Emotion Words)」「感情を記述する語彙 (Descriptive Emotion Words)」「感情に関するメタファーとメトニミー (Emotion Metaphors and Metonymy)」に分けられ、最後に「感情言説分析 (Emotional Discourse Analysis)」が付されている。

はじめに、感情を表出する語彙として、ロシア語に特徴的な感情を表わす間投詞と神の名を含む間投詞がとりあげられる。分析の結果、原文の間投詞はなんらかのやり方で翻訳に反映させられていることが確かめられた。たとえば、“ah!” “o!” “okh!” などの間投詞は、ほとんどの場合、「ああ」と訳されているが、聞き手へのうながしや拒絶、驚きを表わす“nu”、悲しみや憤慨を表わす“uvi”、不快や非難を表わす“fu”などは、それぞれ動的等価性、すなわち言い換えやパラフレーズのストラテジーによって翻訳されている。神の名を含む間投詞では、井桁訳と小沼訳・北垣訳が異なる特徴を示している。後者は動的等価性のやり方で訳しているが、井桁訳は多くの場合「神様」という語彙をあてて訳している。これは井桁訳が他二者と比べて、日本語にとって不自然でも原文の意味を尊重するという形式的等価性のストラテジーを重視していることと関わりがある。

「感情を記述する語彙」については、Newmark の分類にもとづいて、「総称語彙」「基本的な感情語彙」「感情の関係を表わす語彙」「結果としての感情を表わす語彙」「原因としての感情を表わす語彙」「目標としての感情を表わす語彙」「複合的な感情語彙」の6つのカテゴリーに分け、それぞれ4個、17個、11個、18個、4個、3個、15個、合計72個の語彙をとりあげて分析を進める。著者の分析はたいへん緻密であり、原文のなかの感情言語を採り上げるときも、適切な長さの文を引用して、その文脈での感情表現の特有性を考慮に入れながら議論を進めている。また、ひとつの語彙について考察を進める際にも、原文でその語彙が現われる箇所を網羅的に挙げたうえで、それに対応する翻訳文を三種類の訳書から引用しており、用例が多い語彙と少ない語彙との違いが量的に確認できるような工夫がとられている。

分析の過程では数多くの創見が示される。たとえば、ロシア語の“volneniye”や“strast”のような語彙は、幅広い感情を表わす一般的な用法の場合とそのなかの特定の相を表わす個別的な用法が区別される。つまり、一語のなかに広い意味と狭い意味が同居しているので、翻訳の際には意味のレベルを決定するための分析が必要になる。また、“toska”のように“sadness, loneliness, discontent, longing, boredom, regret, compassion and even nostalgia”などの意味が組み合わさり、しかも否定的な意味をもつだけでなく、感傷的なコノテーションをも呼び起こすようなロシア語特有の語彙は、翻訳者に大きな難問をつきつける（日本語訳では「憂愁」「憂鬱」「嘆き」と訳されることが多い）。こうした文化特定の意味をもつ語彙を翻訳するときは、reduction strategy（原語の意味全体を訳すのではなく、その一部だけを訳すやり方）を用いて、動的等価性を目指すことが多い。

第三章の残りの部分では、感情を表わすメタファーとメトニミーが分析される。たとえば、感情が身体的徴候として現れることを表わすメトニミー（「顔を赤らめる」「目を伏せる」）や「心は感情の容器から流れ出る熱い液体である」という認知イメージをもとにした多くのメタフォリカルな表現をとりあげ、翻訳の際に用いられたストラテジーを緻密に分析している。たとえば、「胸が波立つ」のように形式的等価性によって訳していい場合もあるが、「下顎がふるえる」（「不安」を意味する）のように日本語のなかに対応する表現がない場合には、翻訳者は、削減ストラテジーに基づいて動的等価性によって翻訳するか（「唇がふるえる」）、あるいは原語のニュアンスを伝えるためにあえて形式的等価性によって翻訳するか、という選択の前に立たされることになる。

結論では、ロシア語の感情表現の特徴を抜き出して、ロシア語と日本語との意味構造の隔たりが翻訳者にとっての難問を提起することが確認される。この難関を乗り越えるために翻訳ストラテジーが必要になり、原典言語と目標言語それぞれの感情言語の分類を対照させることが必要であることが指摘される。とくに屈折言語であるロシア語の特徴が刻みこまれている表現や文化特定の意味構造をもつ表現を日本語に翻訳するときは、動的等価性による翻訳、あるいは意味レベルの転移による翻訳が要求されることが指摘される。

### 3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は以下の点にある。

第一に、ドストエフスキーの『白夜』のテキストとその三種類の翻訳を対照させて精緻に分析することによって、ロシア語から日本語への翻訳の際に生じる問題をはっきりとしたかたちでとりだして定式化したことである。著者がこれまでの翻訳理論の成果を十分に生かしながら、それを抽象的なレベルで論じるのではなく、ロシア語と日本語のあいだの具体的なテキストの翻訳の際に現われる問題として提示したことは、大きな意味がある。また、三種類の翻訳の比較検討を行ったことで、それぞれの翻訳に際して用いられたストラテジーの違いが把握できただけでなく、日本語の翻訳文体の変化についても一定の観察を得ることができた。こうした分析を通して、原典と翻訳の関係が固定的なものではなく、翻訳の多数性として現われることが実感できるものとなった。

第二に、こうした翻訳理論に感情言語の分析を結びつけたことである。言語のなかで感情を表わす語彙や表現には、知的概念を表わす語彙とはまったく異なる特徴があり、そのことが翻訳の際に前面に現われてくる。とくに問題になるのは、言語の文法的性質が結びついている場合と意味内容が文化特定の場である。本論文で筆者が数多くの語彙と表現をとりあげて緻密な分析にかけたことによって、ロシア語と日本語の感情言語の特質を把握することができ、さらには両言語における心理描写の方法の違いさえ明らかになった。さらには、そのことが翻訳者にいかなる難問を投げかけ、それを乗り越えるためにいかなる翻訳ストラテジーがありうるかという問題に取り組んで、一定の解答を提示することができた。これは、ロシア語研究のみならず、翻訳研究、意味論研究にとってたいへん大きな成果であるといえる。

第三に、こうした作業がロシア語母語話者の言語感覚にもとづいてなされたことにも大きな意味がある。これまで翻訳の比較対照は、目標言語（この場合は日本語）の側からなされることが多かったが、著者のように十分な日本語能力をもつロシア語母語話者がその

問題に取り組んだことによって、多くの問題を新たに掘り起こすことができた。

しかし、本論文にもいくつかの問題点が見られる。

第一に、感情言語の分析が語彙のレベルにかたよっていて、ディスコースのレベルにまで十分に達していない点である。たしかに序章では“emotional discourse analysis”が触れられており、本文にもそれに対応する節があるが、十分に分析がなされたとはいえない。本論文の対象としてあげられた要素の多くは、登場人物の発話から取られている。つまり、人物の感情が発話されたことばとして表出される場合である。しかし、いわゆる「地の文」における感情表出の問題はその視点だけでは論じることができない。その場合には、文体のトーンや文章の人称の問題についても言及が必要になるだろう。

第二に、ロシア語の文章語における感情表現の形成という問題を視野に入れたならば、さらに多面的で豊かな分析を行うことができたはずである。ロシア語の文章語において西欧言語におけるような自由な感情表出が可能になったのは、18世紀末から19世紀初めにかけて、センチメンタリズム文学の旗手カラムジンの活躍と、彼の登場を契機として起こった「新旧文体・言語論争」以降のことであり、『白夜』から遡ることたかだか半世紀前のことにすぎない。そしてそこには西欧語からの翻訳に関する議論が大きな役割を果たしていた。つまり、本論文でとりあげられるロシア語の感情表現の多くが、翻訳をめぐる多くの試み(外国語の直接的借用、新造語作成等)を通して形成されたわけである。もちろん、本論文はテキスト分析の方法を用いたので、こうした歴史的な考察を入れることは論文の主旨にそぐわないことは理解できる。したがって、この点は本論文の欠点ではなく、むしろ本論文が感情言語の問題の広がりをも提示したおかげで見えてきたテーマということができる。著者がさらに研究を進める事が期待される。

#### 4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者に一橋大学博士(学術)の学位を授与することが適当であると考えられる。

## 最終試験結果の要旨

2013年5月15日

論文審査委員

糟谷 啓介

イ ヨンスク

坂内 徳明

2013年4月17日、学位請求論文提出者 アレクサンドラ・ホロボロドゥコ 氏の論文“The Problem of Translating Emotion Words from Russian into Japanese in F. Dostoevsky’s Novel “White Nights”: Contrastive Analysis of Three Japanese Translations with the Original Russian Text Concerning Emotional Discourse”に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、アレクサンドラ・ホロボロドゥコ 氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、アレクサンドラ・ホロボロドゥコ 氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。